
法隆寺の聖徳太子絵伝を読み解く

——絵の描かれた「信仰環境の総体」をテキストとして——

太田昌子

〈金沢美術工芸大学〉

1 絵とその居場所

絵は「場所」のなかで生きている。

場所とは、絵が描かれ、セットされるその「場所」のことだ。

聖徳太子絵伝のような宗教絵画でいえば、何よりも、人びとが絵伝を礼拝した当のその「場所」ということになるだろう。さらにそこを拠点として、まわりに広がる「信仰環境の総体」を指してそう呼んでもいいかもしれない。

絵は場所の中で生きているのだという、この大きな脈絡を抜きにして、絵を絵だけで語ることはできない。しかし、近代以後の社会では、絵をみるのにも、完成した「作品」だけがすべてだと考えるふうになってきている。絵はそれ自体として、美術館で見るもの、または美術書で見るものという傾向が習慣化してきている。こうしたなか、私たちは、こうした近現代とはまた異なる、古代、中世の絵画についてさえ、それらの本来置かれていた「場所」の中での働きを見失いがちである¹。

本小論の目的は、この問題について、法隆寺でつくられた、平安と鎌倉の二つの聖徳太子絵伝を通して考えてみることにある。これらの絵伝がそれぞれの「場所」、それぞれの「宗教環境」のなかで、どのような働きをしていたかという、大きな脈絡のなかで、これらの絵を読み解くつもりだ。平安から鎌倉への転換といえ、まさしく「場所」における絵の働きそのものが大きく変化した変動期でもあったから、逆にその変化に狙いを定めることによって、問題の輪郭を明らかにできるのではないかという期待もある。ここでこれから比較してゆくことになる、法隆寺の二つの絵伝は、その変化——平安のものが壁画であり、鎌倉のものは掛幅であるという——がまずは画面形式に現れており、これらは、換言すれば、表現媒体として異なるメディアであることをまず念頭に置いておかなければならない。

古代の太子絵伝は、おおむね壁画や障子絵に描かれていたのに対して、中世には鎌倉時代を境に、四幅なり八幅なりを一セットとした掛幅の絵伝があたりまえになってゆく。壁画は堂塔伽藍の内部にあって、その内部を荘厳し、そうすることで建築の内部に一つの世界を創り出す。この場合、絵はその場から動くことはない。それに対して掛幅の絵伝は、布教や勧進などのために各地に持ち運ばれ、かつてない複雑なネットワークのなかに置かれることになった。報恩や結縁、あるいは供養のための講式の場にセットされるなど、持ち運ばれたさきざきでの仏事法会がそのたびごとの「場所」ということになったのだ。しかし、それは、絵が「場所」と無縁の存在となったことを意味するものではない。むしろ、絵が固定的な場を離れたその分だけ、絵はあらたな「場所」のなかを生きはじめることになったことを意味している。

1 太田昌子・大西廣共著「絵の「居場所」」（『朝日百科 日本の国宝 別冊 国宝と歴史の旅』1～12、1999.4～2001.6）。岩波書店より近刊予定。

まず、初めに古代に法隆寺の絵殿に描かれた壁画の聖徳太子絵伝の方であるが、あわせて同じ法隆寺でつくられた、鎌倉末期の掛幅絵伝とも比較しつつ、古代から中世へという時代の転換期に何が起こったかを考え、これを一つのケーススタディとしたい。

2 斑鳩の中にもう一つの「斑鳩」がある

絵の「場所」の問題がいかに重要であるかを初めに実感したのは、古代の太子絵伝(図1)の研究を通じてであった。この絵伝は、いまは上野の東京国立博物館の法隆寺宝物館に納められており、現存最古の聖徳太子絵伝として知られるものである。まずその研究過程で発見したこの絵伝の「入れ子」の構造について述べよう²。平安時代の中期、延久元年(1069)の夏、法隆寺³では、かつて太子の斑鳩宮があったという東院伽藍の一郭に、太子の事績を顕彰するための絵殿(図2、3)が七丈屋に特別に建造された。これによって、聖徳太子の生涯が、太子の生きた斑鳩宮の故地に、イメージとして蘇ることになったのである。建物の内部三面をフルに活かした障子絵によって、文字どおり斑鳩宮を中心とする一大パノラマ図が繰り広げられることになった。

この時、障子絵の制作には、四天王寺をはじめ永い太子信仰の伝統を持つ、摂津の絵師・秦致貞が招かれた。また同じプロジェクトの一環として、太子の尊像である「童子形御影」を、これも近くの信貴山の仏師、円快がつくっている⁴。さらに絵殿と並んで、釈迦の聖遺物(遺骨)を納める舍利殿も建設された(図3)。そしていうまでもなく、それらの南には、すでに伽藍の中核をなす夢殿が8世紀以来あって、太子はその本尊である救世観音の化身だとされていた。

それらすべてを併せ考えると、まさしくこの時をもって、釈迦と聖徳太子、つまり仏陀と真宗でいうところの「和国の教主」を統合する、太子信仰の基本システムが確立したといっても過言ではなからう。さらに伽藍の中に尊像と絵伝の二つが完備したことで、信仰環境の総体を束ねるにふさわしい、中核的なモニュメントが完成したと見ることもできる。現に、これ以後、人びとは、尊像を拝し、絵伝を見るために、ここに巡礼するようになった⁵。

「入れ子」の構造というのは、大きくは、そうした信仰圏の広がりとその中核的なモニュメントの関係にほかならないが、より直接的には、もちろん、かつての斑鳩宮のあった地に、絵をもってするもう一つの「斑鳩宮」が出現したことを意味している。

もっとも、さきにも触れたように、当の絵伝そのものは、近代に入って間もない明治十一年(1878)に、皇室への献納宝物として法隆寺を離れ、いまでは東京国立博物館の法隆寺宝物館に納まっている。皮肉にも美術館という名の、絵を見るための近代的施設に恵まれた、その反面で私たちは、斑鳩の中にもう一つの「斑鳩」があるという、この旧絵殿本の「入れ子」の構造を本来あったその場で実際に体験する機会を失うことになったのだ⁶。

-
- 2 太田昌子「法隆寺絵殿本「聖徳太子絵伝」の語りの構造—太子絵伝研究序説」(『金沢美術工芸大学 紀要』42号、1998)
太田昌子「たがいに呼応しあう絵の内と外—聖徳太子絵伝」(『朝日百科 日本の国宝 別冊 国宝と歴史の旅』1、1999.4)
- 3 現在の東院伽藍は、この延久元年時点では次の註4に引いた資料などからもわかるのだが、「上宮王院」と呼ばれており、12世紀になって法隆寺に組み込まれていったとされている。
- 4 『嘉元記』(『法隆寺別当次第』引用)「延久元年西巳二月ヨリ五月マテ上宮王院之繪殿書之也／同年六月十六日奉繪殿渡畢繪師攝津国大波郷住人秦致眞童／子形佛師信貴山住僧圓快淨如房」とある。また、聖徳太子座像の胎内墨書銘には、「佛師僧圓快、繪師秦致貞」とみえる。いずれも奈良国立博物館編『聖徳太子絵伝』(東京美術、1969)より重引。
- 5 『建久御巡礼記』法隆寺条「当麻寺織仏可拝給、日既可暮、絵殿不説御坐、起此寺御坐、龍田河上渡、オハシマシテ云々」。
- 6 旧絵殿本太子絵伝に関する研究は、以下に掲出したとおり、主要なものだけでも少なくはないが、背景の自然景観についてその連続性および地理的整合性などに言及したものは見あたらない。
藤懸静也「法隆寺絵殿聖徳太子絵伝に就いて」(『国華』415、1925)／源豊宗「初期大和絵としての御物聖徳太子絵伝」(『仏教芸術』18、1941)／田中重久「聖徳太子伝暦と御物聖徳太子絵伝」(『聖徳太子絵伝と尊像の研究』1943)／田中重久「法隆寺東院絵殿の壁画」(『日本壁画の研究』1944)／高崎富士彦「聖徳太子絵伝屏風」(『MUSEUM』77、1957)／秋山光和「法

3 埋もれていた雄大な景観

問題は、しかし、斑鳩宮だけではない。

壁画絵伝の全景観を丁寧に復原してみると、太子の生涯ができるだけその「場所」に忠実に再現されていたことが浮かび上がってきた。言い換えれば、斑鳩の地を核心に置いて、大和から山城へ、そして難波へと広がる、太子をめぐる信仰環境の総体とそっくり相似形をなした、「入れ子」の小宇宙が東院伽藍のこの絵殿の内部に組み立てられていたのだ。

「旧絵殿本聖徳太子絵伝描き起こし景観図」（図4）は、物語の主体になる人物や建物などはすべて省略し、山や川や樹林などの自然景観だけを実作品を見ながら、大西廣によって独自に描き起こされたものである⁷。すぐ後に詳しく述べるが、これが太子の生きた「場所」を驚くほど合理的に再現したものになっていると同時に、時間・空間の案配なども含め、生涯の物語をいかに効果的、かつ印象的に分節化し、再構成するかという点でも、決定的な役割を果たしている。

従来の研究では、絵の傷みが激しいことも原因して、検討の対象ともされず、茫漠とした大和絵風景画というふうに見られてきた歴史がながいのが、物語の背景をなすこれらの自然描写であった。最近でも、せいぜいが方角はだいたい地理的に合致していると指摘するぐらいであった⁸。ところが、結果としては幸いなことに、人のよく指さしなどする人物や建物とは違って、自然景観の部分には、本来の「立湧模様」の綾網が比較的良好に残っており、それらを丹念にたどってみると、いま挙げた「描き起こし景観図」のような、前景から中景、遠景へと開けてゆく雄大な地理的な展望が浮かび上がってきたのである。

何よりも驚かされるのは、縦2m、横12m以上もの超巨大景観が、全体としてひと繋がりにとまとった、その堅固な構築性ではないだろうか。大和絵の風景画というと、情趣的とか象徴的などと評されることが多いのだが、この絵についても一般の見方はその例外ではなかった。しかしこれが単なる架空の景観どころか、よくいわれるような個々の事績を暗示的に示す脈絡のない茫漠とした道具立てでもないことを、骨格をなすいくつかの地理的再現描写に即して次に指摘しよう。

4 脳裏の地図に照らしながら「読み取る」ことのできる絵

旧絵殿本（図1）は、もとは綾織りの絵絹⁹を壁にセットしたものであったが、現状では、巨大な二曲五隻の屏風形式に改装されている。先に示した「描き起こし景観図」（図4）もそれに従って五つの区画とし、それらに便宜上、右から順にⅠからⅤまでの番号を付してある。なお、事績とその配置については「旧絵殿本聖徳太子絵伝の事績とその配置一覧表」（資料1）を参照されたい。

これらを元来の絵殿内部の配置に戻してみると、右端の第Ⅰ隻が絵殿の東の壁、左端の第Ⅴ隻が西の壁に配置され、中央の三隻分が北の壁全面を占めていたことになる。その画面のうち、聖徳太子の宮居であった斑鳩宮が、北の壁の中央、つまりⅢ隻目とⅣ隻目にまたがって描かれている。法隆寺に巡礼してきた人びと

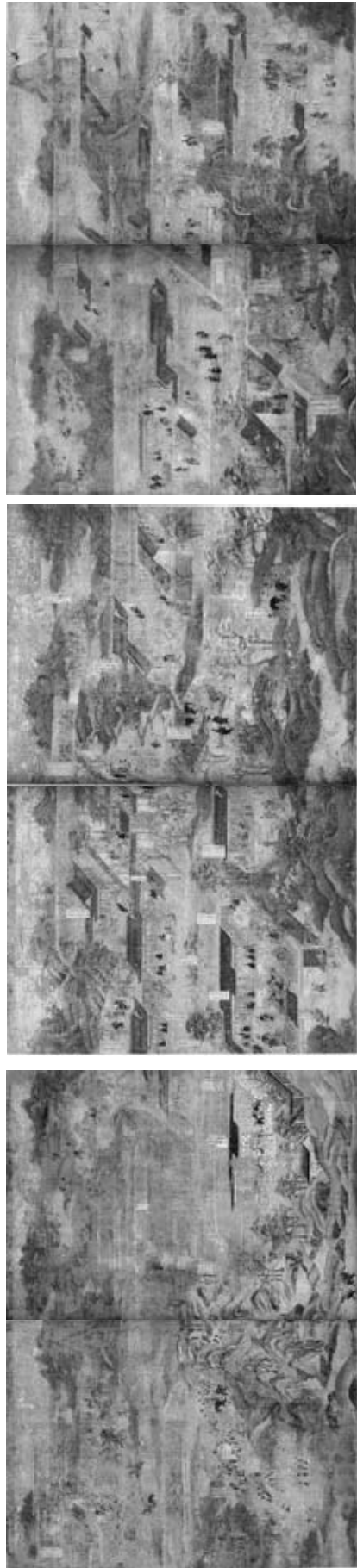
隆寺絵殿の聖徳太子絵伝障子絵（『平安時代世俗画の研究』1964）／奈良国立博物館編『聖徳太子絵伝』東京美術、1969。

7 1996年に東京国立博物館で開催された「特別展 法隆寺献納宝物」では、修復なった旧絵殿本全五隻がそろって展示された。その際に大西廣が実作品の観察に基づきながら作成したものが「旧絵殿本聖徳太子絵伝描き起こし景観図」である。これはかつて註2掲掲論文に掲載したものである。

8 奈良国立博物館編『聖徳太子絵伝』（東京美術、1969）の作品解説（菊竹淳一）では「事績場面を年齢順を追わず自由に配置して壮大にえがいている」としながらも「複雑な事績場面の構成については、飛鳥や難波の浜などに見られるように、年齢的条件や地理的条件によって大まかに分類していることは、「絵解き」を考慮して制作されたからである」と指摘するにとどまっている。なお、今岡英子「法隆寺旧蔵「聖徳太子絵伝」研究—その画面構成の性質について」（『哲学会誌』19号、1995）では第4隻での地理的整合性が論じられている。

9 石田茂作「聖徳太子の信仰と絵伝」（奈良国立博物館編『聖徳太子絵伝』東京美術、1969）では、神護寺両界曼荼羅、伝佐理筆綾地切を例に引いて、織出しの地文様がある綾絹は、旧絵殿本の「伝統の古さを示すものだ」という。

図1 国宝 聖徳太子絵伝（秦政貞筆） 絹本着色 二曲五隻 東京国立博物館法隆寺献納宝物 延久元年（1069） 各隻縦185.3（～185.7）× 横269.4（～291.7）cm



IV

III

II

I



図2 法隆寺絵殿復元図（昭和18年（1943）の修理報告書に基づき作成）

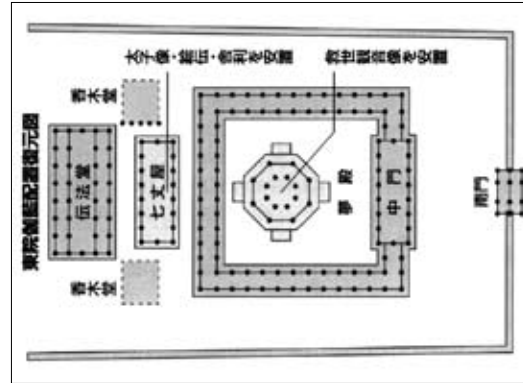
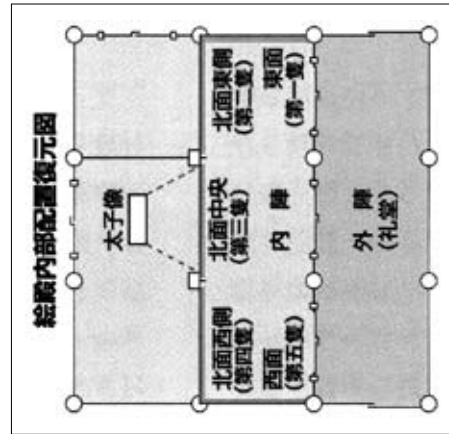


図3 法隆寺東院伽藍復元図（浅野清「法隆寺東院伽藍配置復元図」に基づき作成）

図2、図3ともに太田昌子・大西廣「絵の居場所1 たがいに呼応しあう絵の内と外—聖徳太子絵伝」（『朝日百科 日本の国宝 別冊 国宝と歴史の旅』1、1999）より転載した。

図4 旧絵殿本聖徳太子絵伝描き起こし景観図（大西廣作成）

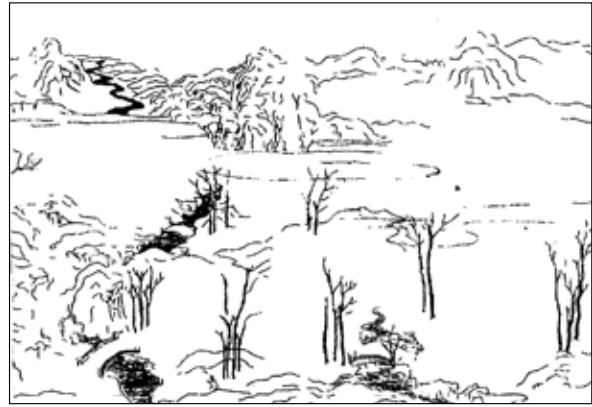
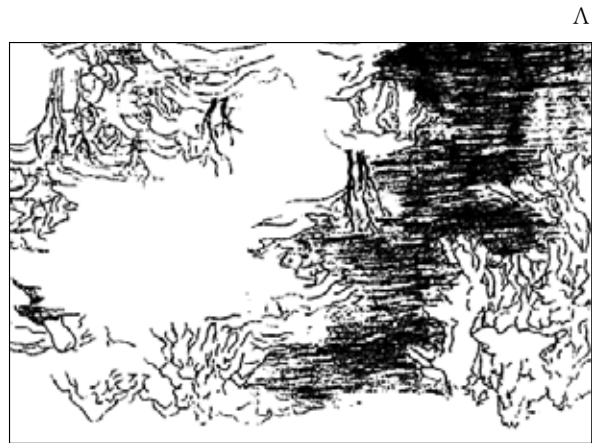


図5 Google Earth による大和盆地を中心とした鳥瞰図



が絵殿の内部に身を置けば、ちょうどそれらを正面にして坐すことになったはずだ。斑鳩の地において、かつて太子の在りし日の斑鳩のイリュージョンを眼のまえにしていたことになる。

第Ⅰ隻から順に眼を移してみて、何よりも驚かされるのは、全体をいくつかの空間に分割している遠近の山並み、そして手前から彼方へとうねうねと流れて消えてゆく何本かの川筋が、どれ一つとして同じものない個性的な描写の確かさだろう。この土地に多少とも親しみを持っているものならば、絵の中の一つひとつの場所を自分たちの脳裏の地図に照らして、指さすように「読み取る」ことができたのではなからうか。

主な山並みと川筋だけを右端から見てゆく。第Ⅰ隻は斑鳩から見て東南方向に当たるが、手前に飛鳥川の一部がちらりと見え、その左寄りに奥まで延々と続いて流れているのが泊瀬川であり、上流の左沿いには三輪山が見える。第Ⅱ隻は、軸線をやや左に移して、桜井を中心とした比較的平坦な地域であるが、右上に太子が黒駒で巡ったという富士山を遠くに配し、左上の彼方には、これも天皇の狩猟を太子が諫めたという伝説の地、兔田野がかすかに望める。第Ⅲ隻、第Ⅳ隻はいよいよ中核をなす斑鳩の地が大部分を占めるが、これはみごとにまでにくっきりと、手前を東西に流れる大和川と北上する富小(雄)川で右端が画定されている。左端の方もまた、第Ⅳ隻目で、手前の大和川と、その支流の竜田川、そして南北に連なる生駒、金剛の両山系によって鮮やかに区切られている。その最北辺には、矢田丘陵を越えて右寄りの彼方に淀川と山崎の橋、そしてやはり伝説では、その橋を渡って、太子が秦河勝の先導で行啓したとされる楓野の地が配されている。あとは、二上山を越えれば、太子の葬られた磯長のある河内ということになる。残る第Ⅴ隻には、河内から摂津、難波を経て、最後は思い切り空想を広げた、東シナ海から中国への眺めとなっている。

5 身体ごとの反応

ここで大切なのは、私たち自身が、巡礼者となって、東院伽藍の絵殿を訪れた気持になってみることであろう。この「入れ子」の構造の中に、直接に身を置くことで、はじめて、聖徳太子の生涯の事績を、一つひとつ、いわば総合感覚的に「読み取る」ことができることになるのだ。「総合感覚的」とは、どのようなことか、その点に留意しながら、鎌倉末に同じ法隆寺でつくられた掛幅の太子絵伝との比較もしてゆく。

端的な一例を挙げれば、いまも注目したばかりの生駒、金剛の山系である。原画の写真図版(図1)を「描き起こし景観図」(図4)と対応させながら、また同時に飛鳥の上空から両山系を越えて、摂津、河内、難波へと眺めやった、Google Earthの鳥瞰図(図5)をもあわせて見ると、さらに、いまから千年ほど前にできた、この絵伝の地理的整合性に驚かされる。

原画の中では肝心の法隆寺は、第Ⅳ隻のほとんど中央全体を占めて大きく描かれているのだが、残念なことに、この絵伝中でもっとも傷みのはげしい部分でもあり、人物など細部はほとんど判別がつかない。しかし、そこに太子の壮年から晩年にかけての諸事績が描かれていたことは間違いなからう。

そう認識したうえで、竜田川から、両山系の接点のあたりをまたいで、この隻の左端の最下段を見ると、かろうじて原画のなかにも、東帯姿や僧形の人物たちの行列らしきものを認めることができる。「描き起こし景観図」で見たように、ここが太子の葬られた河内の磯長、すなわちいまの太子町にほかならない。

十七条憲法や法華経講讃などの太子壮年の華々しい事績を目の当たりにしたかと思えば、はや葬送の時が待ち受けているというこの構成には、まったく驚かされる。これが「場所」の絵の特徴といえよう。見る側からいっても、絵に描かれた生駒、信貴山を越えて、西南方向に、やや身をずらしつつ眼を移すとき、そのような絵に向かったの身体ごとの西南方向への移動こそは、現実世界においても、磯長が斑鳩からいえばちょうど西南方向に位置していることと完全に対応している。脳裏の地図に照らしても、また身体ごとの実感としても、誰もがそこが河内の磯長なのであり、いま太子の葬送の列が行くところなのだとなつてきよう。

これは何も磯長ばかりではなく、太子誕生の飛鳥に向かおうとすれば、たとえば絵殿のなかでも、東の壁の端の方へ、つまりは東南方向へと身をよじらせ、視線を巡らせることになるろう。そしてそれは、実際に、

斑鳩から飛鳥を眺めやるのと同じ方位にびたりと重なったはずだ。そのような、脳裏の地図を働かせての認知、そして絵と「場所」のあいだを行き来する身体ごとの反応、——それらをとりあえず「総合感覚的」な「読み取り」と呼んでみたのだが、しかし、それですべてではない。

6 総合感覚的な絵の読み取り

これまで、この古代の旧絵殿本にあった聖徳太子絵伝については、描き込まれた六十余りの事績が、一見、脈絡無く配置されていて、絵を見ただけでは順を追って読み取るのはほとんど不可能とさえいわれてきたことはまえにも触れた。テキストは、10世紀には太子の総合伝記として成立していたとされる、いわゆる『聖徳太子伝暦』であって、これを参照しながらようやく個々の事績をアイデンティファイできるとされてきたのだ。実際、画中の要所ごとに色紙形や短冊形が貼られ、それらには『伝暦』からの抜き書きが記されており、心強い案内になっている¹⁰。また、巡礼者に対しては、寺の法師によって絵解きがなされていたと推測される¹¹。

あえて「総合感覚的」といったのは、それらをもすべて含めてのことである。しかし、それらがあるから物語が読みとれるというのでは何か欠けてはいないだろうか。声のテキスト、文字のテキストの助けがあり、ときには管弦のテキストを耳にし、さらにそれらの根底に、絵と「場所」とがたがいに交響し合う、もう一つの大きなテキストがあったからこそ、全体をもっとも深いところで「読み取る」ことができたのだということを強調したい。

それをさらに確認するために、さきほどの磯長の場とは別の場面、といっても磯長からほど近いのだが、合戦の場面を見ることにする。

同じ第IV隻の、葬送の場面のすぐ上に、原図からもそのおぼろな様子を窺うことのできる、当の合戦の場面が描かれている(図1-IV、図4-IV)。ここには『伝暦』からの抜き書きも残っており、用明天皇の二年(587)、太子が16歳のときの、渋川での物部守屋討伐の事績を描いていることがわかる。なぜ、50歳で亡くなった太子葬送の場のすぐ上の遙かかなたに、わずか16歳の事績が描かれなければならないのか。

決して自由に散りばめたのではない、この大きな景観構造に身を任せ、「場所」の論理に従いさえするならば、よりいっそうの必然性をもって、かつ容易に謎を解き明かすことができる。すでに見た両山系の地理的脈絡からいえば、斑鳩から信貴山を越えてやや北西に向かった地点が、歴史的にも物部守屋との合戦のあった、いまの東大阪市の渋川の周辺に正確に合致する。これを見れば、人は、なるほど渋川のある所で、あのことがあったのだと納得できたし、それが自然でもあったのだ。

それにしてもこれは、なんと魅力的な幻想場面なのだろう。私たちは、葬送の列の向こうに、若き日の合戦の場面を望みやるのだ。太子の一生でいえば、この合戦に勝利し、四天王寺建立へと向かう、生涯最初の決定的な一事件であった。この第IV隻の左半分こそは、こうして、太子の人生を一瞬のうちに見渡してしまう、「場所」の絵ならではの魅力的な一視角を創出したものといえよう。それもこれも、旧絵殿本太子絵伝を産み出しかつ享受した共同体が、こういう絵をそれこそ「総合感覚的」に了解しあえるものを持っていたからではないか。

10 註8 前掲書の作品解説(菊竹淳一)に翻刻が掲載されている。

11 註5 前掲。

7 掛幅絵伝の文法と「視覚知」

法隆寺には、鎌倉末期の嘉元三年(1305)につくられた、掛幅四幅の絵伝(図6)があり、これもいまは額に改装され、東京国立博物館に納められている¹²。この絵伝四幅の大きさは、それぞれが縦180cm、横85.6cmほどの巨幅であり、掛幅の太子絵伝や縁起絵としてはごく標準的なものといえよう。この太子絵伝では、事績数は旧絵殿本の六十余から七十余りに増加し、その内容をみるとわずかながら削除されたものもあり、その一方で新たに加えられたものもある。そうした事績選択には、当然、ある時代の意志が反映しているとみられるのだが、これは最後で触れることとする。なお、「嘉元本聖徳太子絵伝の事績・配置・セル番号一覧表」(資料2)を参考に付しておいた。また、この絵伝の系譜についても、絵伝の二つの系列、つまり太子関連系寺院と真宗系といわれる、前者のうちに含まれる特異な四季絵的なものとされることが多い¹³のだが、これについても最後に触れる。

鎌倉時代も中期を過ぎると、寺院の社会的経済的基盤も大きく変わり、活発化する定時・臨時の仏事法会や、諸国への勧進活動のため、持ち運びの自由な掛幅という絵画メディアが、太子絵伝にかぎらず、他の祖師絵伝や縁起絵などにおいても、もっとも普通に用いられるようになっていたことはよく知られている。

そうした法会場の場や勧進の場に、これら縦長の掛幅の絵が、ずらりと四幅掛け並べられたところを想像してみよう。法会場の場、勧進の場こそが、これら掛幅メディアにとっての新たな「場所」となったことが明瞭だ。

鎌倉末のこの掛幅絵伝における、主題となる事績の提示の仕方、すなわち、箇々の事績の「プレゼンテーション」の仕方が、古代の壁画とは一変して、いかにも掛幅という絵画メディアだからこその特徴を感じさせるものになっていることに注目したい。掛幅だからこそ「プレゼンテーション」というのは、絵のなかの各部分で太子の事績がいくつかずつにまとめられ、「見てくれ」というふうにあちこちから差し出されているように視覚的にうたえてくることを指す。

嘉元本では、旧絵殿本と異なって前景、中景、遠景といった遠近の差があまりないことも大きな特徴だ。人物や樹木の大きさなどでも、下から上まで、どの部分でもあまり差はないことから、画面のあちこちから均等に、場面が差し出されているように見えるのだろう。注目されるのは、そのように均等に差し出されてくる、それぞれの場面のそのまとまり方である。各幅が、まるでいくつかの島から成り立っているかのような、複数のいわば「空間細胞」のようなものを単位として出来上がっていることだ。

一つの空間の「細胞」は、一つから多いと七つほど、だいたい二、三の事績から成り立っているが、同じテーマであったり、行為自体が類似していたり、または同じような場所で起きたというまとまりになっている。したがって見る側は、なにが、どんなぐあい、どこで起こっているのか、というふうに絵のなかを辿って旅することになる。絵解きをする側も、この「細胞」によって構成されていることによって、真宗系に多い年齢順にフリーズ状になっている掛幅絵伝とは異なって、相手に応じて、どのテーマからも、またどの場所からも太子世界の旅に導くことができるようになっているのだ。嘉元本の文法が見えてくると、向こうからくっきりとかたちをなして呼びかけてくる、その一つひとつの「細胞」の単位に、それを特徴づける名付けができそうだ。たとえば「幼年の奇蹟」とか「献上の庭」、あるいは「斑鳩宮の出来事」などという

12 4面、絹本着色、縦179.0×横85.7～86.8cm、東京国立博物館法隆寺献納宝物のうちのひとつ。

紙背墨書(第2、3幅紙背に以下の同文あり。)
「施主交名/僧明鏤/僧慶弘/僧盛弘/僧道専/僧観実/僧乘空/右志者為
訪恩所菩提/祈自身滅罪生善遠助/法界之含識也/嘉元三季乙巳三月二五日/図絵功畢首尾二八日/仏師/上野法橋/但馬
房」

13 この考えは菊竹淳一「聖徳太子絵伝にみえる四季絵的要素」(『MUSEUM』226、1970)をはじめとして、ごく最近の朝賀浩「中世聖徳太子絵伝をめぐって」(『聖徳太子ゆかりの名宝 河内三太子 叡福寺・野中寺・大聖勝軍寺』大阪市立美術館、2008)にいたるまで踏襲されている。

ふうに。そうしたことを読み取れるのは、そこに「視覚知」、一見してそれと認知することのできるものが共有されていたからではないだろうか。

ここで現段階で浮かび上がってきた、嘉元本における「空間細胞」を模式化した「嘉元本聖徳太子絵伝の「空間細胞」模式図」(図7)を掲げておいたので、参照いただきたい。

8 嘉元本における「葬送」と「合戦」——「空間細胞」の観点から

掛幅絵伝でも、壁画の太子絵伝で見たのと同じ、「太子葬送」と「守屋討伐」の場面を、「空間細胞」に留意しながら見てみよう。

まず、この二つの事績が、この鎌倉末の嘉元本において、とくに重要視されていたことは、「プレゼンテーション」のあり方そのものに見てとれる。なぜならば、これら二つのテーマだけが他には例を見ない、二幅にまたがる「細胞」として、ともに画幅の最下段、つまり我われにもっとも近い部分にひろやかなスペースを与えられて、差し出されているからだ。掛幅というメディアだからこそそのテーマの提示方法であり、つきさき述べた「視覚知」によって、太子の生涯の二大テーマとしてくっきりと認識されたことだろう。

まずは「葬送」(図7：第一幅第9セル・第二幅第8セル)。

「細胞」としては、いまもいったように第一幅と第二幅にまたがっており、発端の「太子薨去」自体は第二幅右端にある。それを包むようにして、黒一色の衣冠束帯の貴人や女房たちが死を悲しんでいる。その黒一色から転じて、第二幅の中央に、白装束に身を固めた葬送の行列が現れてくる。そしてその行列とは対向するようなかたちで、今度は左端には新羅と任那の遣使たちの死後2年経て仏像を献上する場面があり、さらにその傍らには殉死した太子の愛馬・黒駒がうずくまっている。薨去、哀悼、葬送、殉死、献上という五つの出来事が一つにまとまって、横長の大きな「細胞」を創り出している。なかには、仏像献上のように、2年もあとの事績をも一つのテーマでまとめて、それらを一連の物語として味わえる。

次に「合戦」(図7：第三幅第7セル・第四幅第7セル)。

中心は、第四幅目の戦闘場面だが、すぐ右隣の第三幅下部には、太子一行が四天王像へ戦勝祈願をしているところが描かれている。もちろん物語の流れでいえば、四天王への祈願を行ったうえで、守屋の討伐に向かうという順番なのだ。さきほどの死から葬送への一連の表現と同様に、右幅から左幅へという、いわば「連幅」効果によって、次第に高揚してゆく仕組みになっているのだ。ここでは四天王への祈願の結果として、第四幅目の戦闘場面では秦川勝の放った矢が守屋に当たって勝敗を決する場面となっており、連幅の効果を十分にあげている。

空間の「細胞」が効果を挙げている、掛幅ならではの好例であろう。

9 スペース・セル (Space Cell)

旧絵殿本の障子絵とは、ひとことでいえば、信仰の拠点に創出された、太子世界のユートピアであり、その聖地に向けて人びとは巡礼したといえよう。それに対して、掛幅の嘉元本に求められたのは、なにかといえば、何処であれ、絵が掛けられたそのところ、その場所で説き聞かせるという、直接的な「プレゼンテーション」効果が求められたのではなかろうか。掛幅こそは、時と場所に依じて、移動し、提示し、絵解きすることを基本的機能とするメディアとして、もっともふさわしかったという点で、壁画や障子絵とはちがいが、また絵巻ともはっきり区別して考えられていたことに注意をする必要がある。

その点で、最後にあらためて問題を提起したいのは、いまも法隆寺の掛幅絵伝、嘉元本で例を挙げて見てきたような、画面空間の構成法についての研究、つまり画面を成り立たせている「文法」についての研究の必要である。同じ掛幅でも、真宗系といわれる太子絵伝のように時系列に沿って事績をフリーズ状に並べてゆく方式に対して、それ以外のものについては、いまいった「文法」、つまり先に述べた空間の一種「細胞」

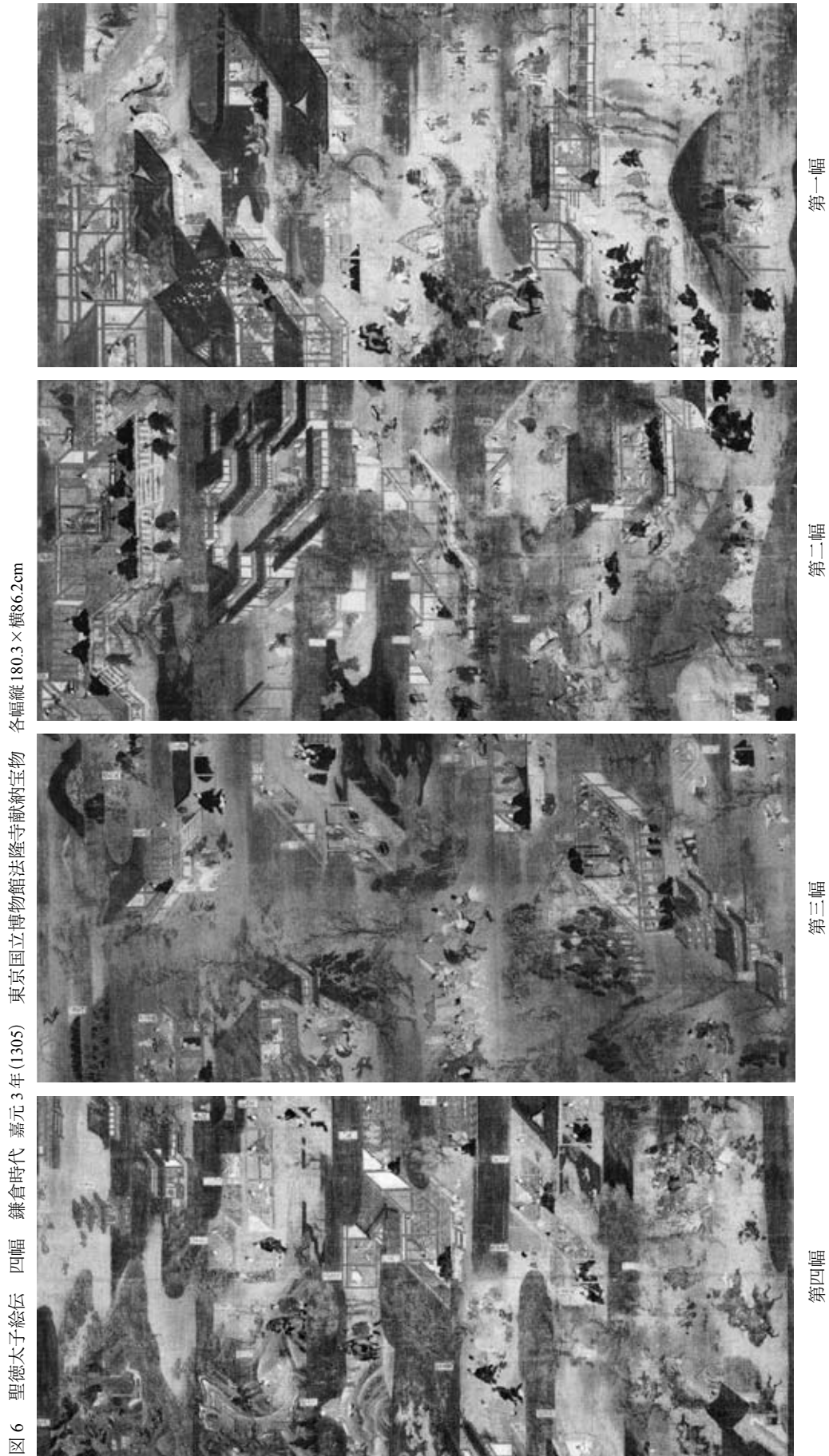
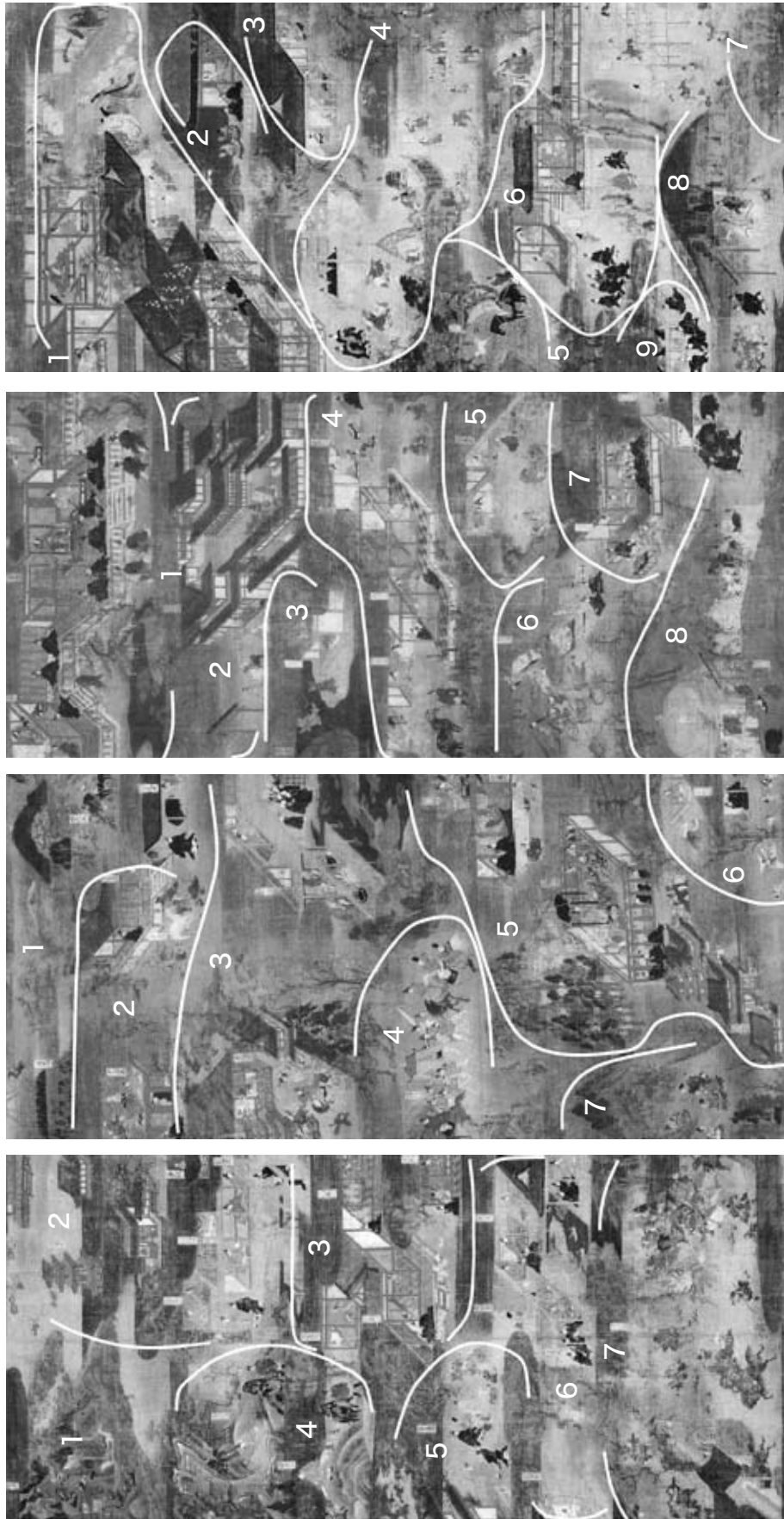


図6 聖徳太子絵伝 四幅 鎌倉時代 嘉元3年(1305) 東京国立博物館法隆寺献納宝物 各幅縦180.3×横86.2cm

図7 嘉元本聖徳太子絵伝の「空間細胞」模式図



第四幅：1 = 唐土（中国）、2 = 斑鳩宮でのこと（夢殿入定・偕老同穴の誓い・赤気・遭願・諸王子昇天）、3 = 飛鳥の仏教傳來など（百濟より經論・新羅より仏像）、4 = 片岡の飢人（達磨）、5 = 法興寺（落慶）、6 = 倉橋宮でのこと（崇峻天皇の暗殺犯人射殺）、7 = 合戦（四天王祈願・守屋討伐、第三幅と連続）

第三幅：1 = 黒駒のこと（懐凶・奈良巡遊・富士登山）、2 = 献上（新羅、百濟）、3 = 忠臣と謀臣（馬子、守屋、川勝）、4 = 行啓（楓野）、5 = 講讀（法華經・勝鬘經）と寺院建立、6 = 日羅の物語、7 = 合戦（四天王祈願・加護、第四幅と連続）

第二幅：1 = 王權繼承と仏法（用明の薨去・推古即位・太子摂政・百濟僧漂着）、2 = 四天王寺建立、3 = 天変怪異（ケイ惑星の出現・靈木漂着）、4 = 十七条憲法、甲斐の黒駒献上、阿佐太子来朝、5 = 献上（伎来）と来朝（惠慈ら）、6 = 天皇の狩獵を諫む、7 = 妹子の派遣と帰朝、8 = 薨去と葬送（第一幅と連続）

第一幅：1 = 受胎、誕生、幼年の奇跡、2 = 新羅討伐、3 = 経疏の執筆と講義、4 = 庭の出来事（宴（柘別）の庭・遊戯の庭・梅よりも松を賞す）、5 = 犬鹿の宿業、6 = 三宝興隆の詔・諸臣寺を建つ、7 = 野辺の菜摘（后を見初める）、8 = 蝦夷鎮撫、9 = 薨去と葬送（第二幅と連続）

のありかたやその働き、さらに「視覚知」との関係などについて、研究はほとんどまだ手つかずといつてよい。

この「空間細胞」という概念は、アメリカの美術史家、マイケル・サリヴァンの中国の山水画論から借用したものである。サリヴァンは、中国からはじまり東アジアに及んだ自然景観の表象を、原始古代から中世にいたる長いスパンのなかで論じている。そのなかで、彼は、山や岩や木や霞によって山水画が構成されていることに着目し、その基本単位を分析した結果、「スペース・セル (Space Cell: 空間細胞)」という概念に到達している¹⁴。

サリヴァンの挙げる要素によって、嘉元本をたんなる事績探しだけでなく、それらをまとめて提示している、空間の単位に着目しなおしてみると、空間の「セル」、つまり「細胞」が出来上がっていることに気づかされるのだ。霞のように、空間の境界をなしているものもあれば、山や岩のように空間の土台になっているものもある。松や桜などの木は、大樹であれば、それだけで境界になるが、場合によっては、境界というのではなく、その樹下に空間ができていて、芸能や布施の場 (図7: 第一幅第6セル・第四幅第5セル) になっていることもある。四幅全体では、七十に余る事績を三十近い「空間細胞」にまとめあげているというふうにはまずはいえそうだ。

壁画の旧絵殿本の場合と同様に、この掛幅の嘉元本もテキストとしては、聖徳太子伝の決定版たる『聖徳太子伝暦』をもととしていることは疑いない。この鎌倉末の頃になれば、テキストは『伝暦』であるが、絵解きは古代以上により広い対象にむけて盛んに行われたはずだ。ここでも旧絵殿本と同じく、音声や文字、そして時に管弦などの助けもあったことだろうが、絵として了解しあえるためには、画幅を分割している「スペース・セル」を読み取ることが不可欠であったはずだ。「セル」のまとまりを、それ自体が一つのテキストとして読み取れたはずだ。ここには死のテーマがあり、こちらは誕生、あれは経の講讃のテーマ、合戦というように。同時代の絵解や談義、あるいは説法などにしても、これらの「セル」を次つぎにたどりながら行われ、参集した会衆たちにしても、何はともあれ、この「セル」を「視覚知」できたからこそ、法会の勧進という「場所」の人たりえたのではないだろうか。

ここに「嘉元本聖徳太子絵伝の「空間細胞」——テーマと分節法」(資料3)を挙げておいたので、先の「嘉元本聖徳太子絵伝の「空間細胞」模式図」(図7)とともに参照いただきたい。

おわりに

本小論では、ともに法隆寺でつくられた、平安の旧絵殿本と鎌倉の嘉元本という、時代も絵画メディアとしても異なる、二つの絵伝について「場所」をキーワードとして読み解き、比較考察を試みてきた。

「場所」から動かざる旧絵殿本については、従来はそれとは明瞭に指摘されてこなかった、法隆寺を世界の中心に据えたかのような、一大パノラマ図が「描き起こし景観図」によって六十近い事績の背後から姿を現してきた。その斑鳩を中心にした地理的整合性と特徴的な景観要素による統一的構成力は驚異的であり、ここに巡礼してきた参詣者は、その「入れ子」効果によって「総合感覚的」に受け入れられたであろう。「入れ子」であることは壁画だからこそ効果を存分に発揮できるといえよう。太子信仰圏の広がりとその中核的なモニュメントとして、同時に、かつての斑鳩宮のあった地と絵によるもう一つの「斑鳩宮」の出現という点で。これらを支えていたのがだれでもが身体に備わっている「総合感覚」ということになる。

嘉元本の特徴は、むしろ自在にそのつど「場所」をあらたに出現させ、報恩・結縁・供養などのために講式法会に参集した人びとの心にテーマを訴えかけることであった。統一的な大景観ではなくて、むしろ、テーマごとに霞や山などで分節化させながら、ひとまとまりごとの「空間細胞」が画幅を構成し、そこからまた

¹⁴ Michael Sullivan, *The Birth of Landscape Painting in China*, The University California Press, 1962.

時代の価値観が透かしみえてくるようだ。それは「視覚知」の問題とも関連してくる今後の課題として、稿を改めて論じたい。

最後に、鎌倉以後の掛幅太子絵伝における四季絵的要素について触れておきたい。従来この嘉元本についても菊竹淳一氏をはじめとして四季絵的要素を指摘することが一般的であり、これは、いわゆる太子関連系寺院の絵伝群の一郭をなし、和歌や連歌をたしなむ教養ある高い階層に対応するものともいわれてきた。確かに、真宗系のように単純明快に太子の生涯を辿れないのが、太子関連系絵伝の特徴でもあるが、四幅四季の対応は、むしろ、数あわせ的な一つの要素であって、これを破綻させている箇所も少なくない。そもそも『伝暦』自体の記述法が、一例を引けば、「春三月」というように、四季と月並みを併記させており、早くからすでに四季の規範を潜ませていたわけだからことは単純ではない。今後は、月次や四季を乱す要因や「空間細胞」の文法を検討してゆくことが残された課題となろう。

資料1 旧絵殿本聖徳太子絵伝の事績とその配置一覧表

★=嘉元本では採用されなかった事績

時系列		事 績	隻
番号	年齢		
1	前世	衡山慧思禅師の転生	5
2	前世	達磨の昇天	5
3	前世	慧思、達磨を請じる	5
4	0	入胎、夢に金人を見て懐妊	1
5	1	既前で出産	1
6	1	産養	1
7	2	合掌、南無仏を唱える	1
8	3	桃花より青松を賞す	1
9	4	父・用明天皇の鞭を進んで受ける	1
10	5	群臣に先じて皇后を拜す	1
11	6	百濟より経論・尼僧の将来	2
12	9	住吉浜にケイ惑星の出現	5
13	★10	蝦夷の鎮撫を太子・群臣が議す	2
14	10	蝦夷の鎮撫	1
15	11	諸童子との遊戯に異能発揮	1
16	★11	石弓の遊戯に抜群の技発揮	1
17	12	日羅の帰国・太子を衆人中に見分け拜す	5
18	13	百濟より弥勒石仏の到来	2
19	★14	馬子、仏殿造営	2
20	14	物部守屋等、堂塔・仏像の破壊	2
21	★16	用明天皇の病に、馬子、法師を呼ぶ	2
22	16	用明天皇の病・崩御	2
23	16	太子、四天王像に戦勝祈願、守屋討伐	4
24	17	百濟より仏舍利・工人到来	1
25	17	崇峻天皇の玉体を相す	2
26	18	牛飼いに穀倉の鍵を与える	4
27	19	冠服	2
28	21	崇峻天皇に献上の猪の悪由を説く	2
29	21	崇峻天皇の暗殺と犯人・直駒射殺	2
30	22	四天王寺建立	5

時系列		事 績	隻
番号	年齢		
31	24	淡路島南岸に霊木漂着	5
32	25	法興寺落慶	3
33	26	百濟より阿佐太子来朝	1
34	27	甲斐より黒駒献上	1
35	27	黒駒に乗り富士登頂	2
36	28	百濟より駱駝・驢・羊・白雉献上	3
37	33	十七条憲法制定	3
38	33	山城楓野に行啓	4
39	35	勝鬘経を講ず	2
40	35	法華経を講ず	2
41	★36	法隆寺学問寺の造営	4
42	36	妹子に衡山持経の探求を命ず	5
43	37	妹子、衡山より帰国	3
48	★37	隋使、微行の太子に下馬敬礼	3
49	37	夢殿入定	4
50	37	青龍車に駕して衡山に行く	5
51	40	勝鬘経疏の完成	3
52	40	兔田野で狩獵の天皇に殺生を諫める	2
53	41	味摩之、伎楽を伝える	3
54	43	犬鹿の宿業を見る	3
55	43	馬子の病に千人出家	2
56	46	再び勝鬘経を講ず	3
57	46	椎坂山で独謡	4
58	48	摂津より人魚の献上	3
59	49	惜別の宴を催す	3
60	49	天に赤気現れる	3
61	50	太子・妃の薨去	4
62	50	葬送・磯長に埋葬	4
63	後2年	新羅・任那、金塔・舍利・幡を献上	5

資料2 嘉元本聖徳太子絵伝の事績・配置・セル番号一覧表

◎=旧絵伝本では採用されなかった事績

番号	年齢	事績	画幅	セル番号	番号	年齢	事績	画幅	セル番号
1	前世	衡山慧思禅師の転生	4	1	37	27	新羅より孔雀献上	3	1
2	0	夢に金人を見て懐妊	1	1	38	◎28	天皇に地震を予言	1	6
3	1	厩前で出産	1	1	39	28	百済より駱駝・驢・羊・白雉献上	3	1
4	1	産養	1	1	40	29	新羅討伐	1	2
5	2	合掌、南無仏を唱う	1	1	41	33	十七条憲法制定	2	?
6	3	桃花より青松を賞す	1	4	42	33	山城楓野に行啓	3	4
7	4	父・用明天皇の鞭を進んで受く	1	1	43	◎34	斑鳩宮に遷る	4	?
8	5	群臣に先じて皇后を拝す	1	6	44	35	勝鬘経を講ず	3	5
9	6	百済より経論・尼僧の将来	4	3	45	35	法華経を講ず	3	5
10	◎7	経論披見、殺生禁断日制定を奏上	4	3	46	36	妹子に衡山持経の探求を命ず	4・2	1・7
11	8	新羅より仏像の献上	4	3	47	37	妹子、衡山より帰国	2	7
12	9	住吉浜にケイ惑星の出現	2	3	48	37	夢殿に入定	4	2
13	10	蝦夷の鎮撫	1	8	49	37	青龍車に駕して衡山に行く	4	1
14	11	諸童子との遊戯に異能発揮	1	4	50	◎38	勝鬘経疏の執筆	2	4
15	12	帰国した日羅、太子を見分けて拝す	3	6	51	◎38	百済僧十人の漂着	2	1?
16	13	百済より弥勒石仏の到来	3	1	52	◎39	黒駒、太子を驚かした事に懊悩	3	1
17	14	物部守屋等、堂塔・仏像の破壊	3	3	53	◎39	妃に偕老同穴を誓う	4	3
18	15	用明天皇を拝す	1	1	54	40	勝鬘経疏の完成	1	3
19	16	用明天皇の病と崩御	2	1	55	40	兔田野で狩猟の天皇に殺生を諫む	2	4
20	16	太子、守屋討伐	4・3	7・7	56	41	味摩之、伎楽を伝う	2	5
21	17	百済より仏舍利・工人到来	1	6	57	◎42	片岡の飢人に会う	4	4
22	17	崇峻天皇の玉体を相す	4	6	58	◎43	法華経疏の執筆	1	3
23	18	牛飼いに穀倉の鍵を与う	2	8	59	43	犬鹿の宿業を見る	1	5
24	19	冠服	4	6	60	43	馬子の病に千人出家	3	3
25	21	崇峻天皇の暗殺(猪・射直駒)	4	6	61	◎44	法華経疏の完成	2	4
26	◎22	推古天皇の即位と太子の摂政就任	2	1	62	◎44	慧慈の百済への帰国	4	3
27	22	四天王寺建立	2	2	63	45	新羅、金仏像を献上	3	1
28	◎23	三宝興隆の詔・諸臣の寺院建立	1	6	64	46	奈良巡遊	3	1
29	24	淡路島南端に霊木漂着	2	2	65	48	摂津より人魚の献上	2	4
30	◎24	慧慈・慧聡の来朝	2	5	66	◎48	心身勝れず遺願を書す	4	3
31	◎25	慧慈に経中の落字を問う	2	4	67	49	惜別の宴を催す	1	4
32	25	法興寺落慶	4	5	68	49	天に赤気現わる	4	1
33	26	百済より阿佐太子来朝	2	4	69	50	太子・妃の薨去	2・1	9・8
34	◎27	妃を迎う	1	7	70	50	葬送・磯長埋葬	2	8
35	27	甲斐より黒駒献上	2	4	71	後2年	新羅・任那、金塔・舍利・幡を献上	2	8
36	27	黒駒に乗り富士登頂	3	2	72	◎後22年	入鹿の斑鳩宮来襲と諸皇子の昇天	4	2

資料3 嘉元本聖徳太子絵伝の「空間細胞」——テーマと分節法

凡例

- 1：空間細胞の記号の意味は以下の通りである。
 ☆＝「事績内容」（誕生関連など）によるまとまりを示す。
 □＝「類似行為」（執筆、献上など）によるまとまりを示す。
 ○＝「類似環境」によるまとまりを示す。
- 2：テーマ欄の各テーマは、筆者の命名によるものを示す。
 また、事績内容を、嘉元本の事績・配置・セル番号一覧表（資料1）の通し番号を各テーマの右の欄に列記した。
- 3：分節法については、「空間細胞」の分節化の役割を果たしている、建物（部屋）、木、霞、山、海、岩などに「分け」を付して分節法の名称とした。

幅 空間細胞 番号・記号	テ ー マ	分 節 法
I-1 ☆□○	受胎、誕生、幼年の奇跡	2, 3, 4, 5, 7, 15, 18
2	新羅討伐	40
3 ☆□○	経疏の執筆、講義	54, ◎58
4 □○	宴（臣下と惜別）の庭、遊戯の庭（童子らと）	14, 67
	梅よりも松を賞す	6
5	犬鹿の宿業を見る	59
6 ☆□○	三宝興隆の詔、仏舍利工人到来・諸臣寺建立	8, 21, ◎28, ◎38
7	太子、后を見初め娶る	◎34
8	蝦夷に重禄を下賜、鎮撫	13
9 ☆	薨去・葬送（第II幅へ）	69
II-1 ○	用明崩御、推古即位、太子加冠、百済僧漂着	16, 19, ◎26, ◎51
2 ○	四天王寺建立	27
3	海辺の奇瑞（住吉浜の惑星・淡路の霊木）	12, 29
4 ☆□○	十七条憲法、黒駒献上、阿佐太子来朝等	◎31, 33, 35, 41, ◎50, ◎61, 65
5 □○	献上（伎楽）と来朝（恵慈ら）	◎30, 56
6	天皇の狩獵を諫める	55
7 ☆□○	小野妹子の派遣と帰朝	46, 47
8 ☆	薨去・葬送・殉死・供養（第I幅から）	23, 69, 70, 71
III-1	黒駒のこと（富士登頂・懊悩・奈良巡遊）	36, ◎52, 64
2 □○	献上（新羅、百済）	16, 37, 39, 63
3 ☆	忠臣と謀臣（馬子と守屋・川勝）	14, 17, 60
4	楓野行啓	42
5 ☆□○	三経講讀	44, 45
6 ☆	日羅の物語	15
7 ☆	合戦（四天王祈願、加護、第IV幅へ）	20
IV-1 ○	唐土（中国）	49, 1
2 ○	法隆寺・斑鳩（夢殿入定、偕老同穴を誓う、遺願、諸王子昇天）	◎43?, 48, ◎53, ◎66, 68, 72
3 □○	飛鳥宮（百済より経論、新羅より仏像）	9, ◎10, 11, ◎62
4 ☆	片岡の飢人伝説	◎57
5	法興寺（落慶）	32
6 ○	崇峻天皇の玉体を相す、天皇の暗殺（倉橋宮）	22, 24, 25
7 ☆	合戦（四天王祈願・守屋討伐、第III幅から）	20